駒場友の会

会報第８号

駒場友の会第乙回演奏会

駒場友の会主催による第二回演奏会が、昨年十一月一日（水）十八時三〇分より九〇〇番教室にて開催されました。演奏は日本を代表する世界的チェロ奏者の鈴木秀美さん。プログラムは、バッハの無伴奏チェロ組曲　第二番（ニ短調）、第四番（変ホ長調）、第五番（ハ短調）。今回の演奏会は、鈴木さんによるバッハ無伴奏組曲全曲演奏会の第二夜。第一夜は六月八日（木）に同じ九〇〇番教室にてオルガン委員会主催で開催されました。第二夜は入場資格が友の会会員・会友と本学学生限定でしたが、会場はほぼ満員。ヘルマン・ゴチェフスキ先生（音楽学）による紹介ののち、鈴木さんがタキシード姿で登場。演奏がはじまると、会場全体が心地よい緊張に包まれました。会場の九〇〇番教室は、卒業生にとっては、かつて講義や試験を受けた思い出の場所ですが、座席は固く、照明は煌々たる水銀灯、残響も短く、コンサートホールのような心地よさには欠けるのは致し方ないところ。それにもかかわらず、聴衆の熱気と集中力に応えて、鈴木さんの演奏は冴えわたり、一同バロックチェロの名演奏に酔いしれました。鳴りやまない拍手に応えて、鈴木さんがユーモア溢れるご挨拶。アンコールとして無伴奏チェロ組曲第三番（ハ長調）よりサラバンドが演奏されて終演となりました。

駒場の樹木をめぐる講演会とイベント

平成十八年度のホームカミングデイが、十一月十一日（土）に開催され、駒場友の会主催による駒場の樹木をめぐる講演会が行われました。これは昨年のホームカミングデイに続くもので、その時講演をお願いした大学院農学生命科学研究科教授・北海道演習林長の梶幹男先生に、今年度も講演をお願いしました。今回の講演題目は「カエデ学ことはじめ」でした。講演会を新装なった駒場コミュニケーション・プラザで行い、その後、駒場の樹木に名前のプレートを付けるイベントを、会場に近い矢内原公園で行う予定でした。当日は、残念ながら強風と雨の荒れ模様の天気でしたが、直前に行われたピアノの演奏披露会の後を受け、出席者は七〇名前後と予想を上回る人数でした。

講演内容は、我々が通常カエデあるいはモミジと呼び慣わしているカエデの仲間に関するもので、カエデには非常に多くの種類があること、その葉の形、紅葉の色なども実は様々なものがあることが豊富な写真で示され、非常に興味深いものでした。講演後も数多くの質問があり、予定時間を超えて質疑が繰り返されました。講演後のプレート掛けのイベントは、天候が回復せず、残念ながら中止になってしまいました。この時に用意したプレートは、その後、事務の方々の手で矢内原公園の主な木々に掛けられています。駒場に足を運んだ際には、これらのプレートを確認してみてください。新しい発見があるかもしれません。

総合文化研究科広域科学専攻　遠藤泰樹

様々な同窓会

青柳晃一

年を取って暇が出来てからは、様々な同期・同窓の会に努めて出席するようにしているが、一番出心地が良いのは年一回の小学校の同期会である。戦火を浴びて東京郊外に生き残った仲間たちで、今や常時集うのは二十人前後に減ってしまったが、腕白小僧・泣虫乙女の昔からの付き合いだから、何の遠慮も無しにダベリ合い歌い交わし肩組み合う。そのなかには、高校から大学まで一緒だった友人もいれば、高校は別だったが奇しくも大学の同じクラスで巡り会った友もいる。中学・高校の同期会は今は二年に一度の年の暮れに開かれているが、十年ほど前まではご高齢の恩師が出席されることもあったのに、二六〇名程いた仲間のうち二割近くが既に物故者となり、毎年櫛の歯を引くように、一人二人と生存者名

簿から名前が消えていく。そういう事情は大学の同期会でも同じだが、私のいた文一七Bというクラスには、またとない面倒見の良い友がいて、最低でも年に二回ほど趣向を変えては顔を合わせる機会を作ってくれる。老境に入ってからはこれにも努めて出席するようにしているが、出てくるほどの人のなかにはまだまだ元気で仕事に趣味に精出している人も多く、できるだけその活力のお裾分けに預かることにしている。

同窓会といえば、一昨昨年の夏から一年間在籍する機会のあったベルリンのフンボルト大学は、明治十年創設の東京大学が学制上ひとつの範とした大学で、実に多くの東大出身者がその同窓生として名を連ねている。最もよく知られているのは、森鴎外であり、嘗て彼の一時の下宿先だった建物が今では彼の名を冠した記念館となって大学の日本学科の責任の下に運営され、鴎外の事績やひいては広く日本の文化の紹介に積極的な役割を果たしている。若き日の鴎外がベルリンで活躍していた頃、哲学者の井上哲次郎が日本学科の初代客員教授として在籍し、その周りには様々な日本人留学生が集まっていたらしい。或る若いドイツ人の日本学研究者が、嘗てフンボルト大学（HU）で学んだ日本人留学生の事績を詳細に調査し、その名簿をまとめた小冊子を出しているが、それを見ると実に多くの東京大学出身者がHUで学んでいることが分かる。十九世紀末から二十世紀末にかけての物理学の革新でも有名な大学なので、その方面の学者の名前だけでも挙げてみると、アインシュタインを初めて日本に紹介し、相対性理論に関する最初期の啓蒙家として知られた石原純、日常生活における物理現象を取り上げて物性論の発展に貢献し名随筆家としても名声を博した寺田寅彦、日本における産学協同のモデルとなり、今日も独自な研究を推進している理化学研究所の創設に関わった大河内正敏、ラザフォードの有核模型の先駆となった土星型原子核模型を構想し後には湯川秀樹のノーベル賞受賞に寄与した長岡半太郎等がこの大学に学んでいる。数学では高木貞治一人の名前を挙げるだけで十分であろう。文科系でも、ドイツ文学は言うに及ばず、法学・経済学・哲学・言語学・美学・教育学・宗教学等の分野でそれぞれ指導的な役割を果たし今日に至るまで大きな影響を与えている多くの学者たちが嘗てのベルリン大学で学んでいる。学者だけではなく、政界・法曹界・経済界で活躍した人材も数多く、政治家だけを数えても国会議員は二十名を越え、大臣経験者は五指に余る。第二次大戦の終戦を決定した内閣の首相鈴木貫太郎がベルリン大学で学んだことも私はその小冊子で思い出した。

「駒場友の会」は、旧来の同窓会や同期会と比べると、より「開かれた」組織で、会則をよく読むとその意志さえあれば誰でも会員になれるようにできている。しかし組織が開かれているということは、共同体として「閉じる」契機がより少ないことをも意味しており、それだけ会の維持や運営の難しさを伴うことになるであろう。本間長世会長を始め事務局長その他、役職にいる方々のご苦心の程が偲ばれるが、関係者の方々のご努力で会が更に成長してゆくのを待ちたいものである。あと三年すれば、教養学部も還暦の齢を迎えることになるが、すでに駒場はベルリンHUに少しも劣らない多くの人材を輩出していると言えるのである。特に最近は駒場のキャンパスで教えたり学んだりする外国人の数が増えている。そのなかには、森鴎外や高木貞治に匹敵するような業績を挙げる学者や研究者が必ずいて、後の世に名を残すことになるであろう。その方々もまた、「駒場友の会」の得難いメンバーであって欲しいものである。

25LI7B、三十年教養学科イギリス分科卒、三二年大学院人文科学研究科比較文学・比較文化課程修士修了

緑あふれる駒場

大森正之

駒場を去って、はや二年半の歳月が流れた。しかし、いまだ何やかやと駒場キャンパスに出入りし、先生方のひんしゅくを買っている。私達、理系の教員は主に、そば屋門なる通用門を通り抜け、駒場小学校との境界を流れる小川に沿ってキャンパスに入る。この流れは下水ではない。れっきとした湧き水である。小径の右側はかなりうっそうとした林と笹藪になっている。かつては官舎が一軒あったが、その建物も今は無く、あたり一面すっかり草木に埋もれてしまった。この空き地と言おうか、緑地と言おうか、こぢんまりした都会の自然林を数多くの鳥や、昆虫が訪れる。生物教室の池内教授によれば、カラスやスズメばかりではなく、シジュウカラ、ツグミ、コガラ、ホオジロ、セキレイ、オナガ、メジロ、ウグイス、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリなども見かけられるという。私も、キツツキのカッカッカッという幹をたたく大きな音にびっくりして振り返ったことを良く覚えている。

駒場キャンパスは、都会のど真ん中にある割には緑に恵まれている。西側には駒場公園があり、線路を越えて南側には駒場野公園がある。キャンパス内にもかなりの数の大きな樹木がゆったりと枝を広げている。老木が目立つようになった桜の木も巡り来る春には爛漫の美しさを誇り、銀杏並木は四季折々の変化を楽しませてくれる。初夏のツツジの赤紫や夏の欅の緑も忘れられない。草むらに目をやれば、白花タ

ンポポやセリバヒエン（飛燕）草がその可憐な姿をのぞかせている。駒場キャンパスはもともと農学部のキャンパスであったため、今でも貴重な植物の宝庫と言われている。これだけの緑に包まれて、研究、勉学に勤しめる私たちは幸せ者である。この素晴らしい緑を何とか守って行かねばならない。

かつて、そば屋門脇の緑地を一般市民向けの駐輪場として整備してもらいたいとの要望が目黒区よりあったことがある。いろいろの理由があるのは十分に理解できたが、環境委員会は断固としてこの要請を拒否した。落ち着いた教育の場としての樹々の緑の大事さは何者にも代え難いと判断したからである。駐輪場の便利さなどとはとても比べものにならない。そこで、緑の素晴らしさを一般の市民の方にも味わい、理解してもらうために、そば屋門、坂下門周辺を自然庭園として整備することを考え、キャンパス西側緑地の保全を学部の整備計画に盛り込んでいただいた。現在は旧同窓会館跡に出来た駒場ファカルティハウスと一体化した庭園として大事な位置を占めている。

森の緑が私たちに安堵感を与えてくれるのは、人類が森にその起源を発していることによるのであろう。緑を失うこと、それは人類の終焉を意味しよう。そうならぬためにこそ、緑の大切さを次の世代に伝えていくのは私たちの義務であろう。キャンパスを巣立っていった多くの学生達が、社会の荒波の中で、ふと、過ぎし駒場での若き日々を思い出すとき、そこにこんもりと緑に繁った楠の大木が、天にそびえる銀杏並木や欅の林が、そして緑に包まれた学舎が、色鮮やかに浮かび上がって来て欲しい。緑あふれる駒場の素晴らしいキャンパスがいつまでも守られるよう心から祈って止まない。駒場友の会としても出来るお手伝いはしようではありませんか。

名誉教授　元環境委員会委員長

映画、知らない国を知るということ

韓　静　妍

私が日本に来たのは映画のためだといってよい。というのは、日本という国と日本語という言語に興味を持つようになったのが映画のためだからである。

私が韓国で学部生だった一九九〇年代前半まで（私は韓国で大学を卒業してから会社に勤めたり大学院に通ったりしてから留学したため、かなり年取った院生だ）、韓国は日本文化の流入を制限していた。日本から解放されて五十年しか経っていなかったから、まだ何らかの拒否感のようなものが残っていたわけである。したがって、日本文化が開放された一九九〇年代後半までは、法律に違反せずに日本の映画を見る方法はなかった。

話が変わるが、私が大学を卒業した一九九五年は、リュミエール兄弟がシネマトグラフ（撮影兼映写機）を発明して『ラ・シオタ駅への列車の到着』という最初の映画を上映した一八九五年から百周年を迎える年だった。映画誕生百周年を迎えて、韓国には二つの重要な出来事があった。一つは釜山国際映画祭が始まったこと、もう一つは『ＫＩＮＯ』という映画専門雑誌の創刊である。映画館で公開される映画の情報しか載せない他の雑誌とは違って、この『ＫＩＮＯ』という雑誌は韓国で公開されない映画を主に扱う、不思議な雑誌だった。必ずそうとは言えないが、公開されない映画というのは芸術映画である可能性が高い。当時はまだ日本の映画は禁止されていた。こういう理由で『ＫＩＮＯ』には色々な国の芸術映画とともに、日本映画の情報が載っていた。

既存の大衆向けの映画に飽きていた人たちは、『ＫＩＮＯ』に載っている新しい映画を見たいと思い始め、それに伴ってシネマテークと呼ばれるものが盛んになり始めた。シネマテークの本来の意味とは違うかもしれないが、当時のシネマテークは、個人的に海外で手に入れたりした映画をビデオにコピーして個人で字幕を入れたりして、上映会を開いたり、ビデオを貸出ししたりするところだった。そこで私は日本映画を初めて見たのである。それは全く新しい経験だった。

映画を見るということは、単なる娯楽行為ではない。映画を見たらその国がわかる。行ったこともない、知らない国の情緒というのがわかるようになる。ここまでは文学作品も同じだ。すごいのは、映画はその国の街や人々を「実際に」見せてくれるということである。私が日本に来る前にも既に日本人と中国人を見分けられたのはそのお蔭である。もう一つのすごいところは、映画からはその国の言葉を聴く機会を与えられるという点である。全く接したことのない言語、その発音や抑揚、特有の声のトーン、言い方などを耳にすることができる（勿論吹き替えの場合は全然違うが）。聞き慣れない言語は最初はおかしく聞こえたりもするが、慣れてきたらリズムを楽しむことさえできるようになる。新しい音楽を聴くのと同じである。リズムを楽しんでいたら、そういうリズムの言語を使っている人々のことがわかるような気がする。またわかりたい気持ちにもなる。こういうわけで私は日本という国と日本語という言語に興味を持つようになり、留学まですることになったのである。

しかし最近の韓国では、理由は昔と違うが再び昔に戻って、映画館で公開される映画しか見ないようになってしまった。人々は大ヒット作しか見ない。巨大資本による映画産業、本を読まない世代の浅い文化素養、何が原因なの

か未だに私にはわからない。『KINO』は廃刊され、シネマテークもなくなった。芸術映画を主に上映していた映画館もほとんどなくなってしまった。日本も事情はあまり変わらないような気がする。大ヒット作しか見ない人が多いのは勿論、映画をほとんど見ない人もいるようだ。しかし幸い日本には、まだ非主流の映画を上映する小規模の映画館も健在しており、ビデオ・レンタルショップにはほかでは手に入れにくい珍しい映画がいっぱいある。映画を通じて知らない国の情緒や言語を知るということ、その楽しさを経験する人々がもっと多くなることを、心から祈る。

大学院総合文化研究科
言語情報科学専攻博士課程在学中

シニアも参加できる国際協力活動
―JHP・学校をつくる会

吉岡健治

二〇〇〇年代は若い人にバトンタッチしようと、外資会社の役員を一九九九年十二月三一日付け六一歳半ばで退任し、全くのフリーとなった。退職後はボランティア活動をやりたいとかねてから考えていたので、世田谷区のFM放送の特派員とか不定期な活動をしていたが、ちょうど一年経った頃、新聞のボランティア欄でJHP・学校をつくる会という団体がカンボジア駐在員を募集しているのを見つけ応募してみた。NPO、NGO団体といえどもほとんどのところが三十歳台までと年齢制限をしていたのに、この団体は代表が当時で七十歳をこえていた脚本家の小山内美江子さんであったためか、年齢制限がなく是非きて欲しいということになった。それもカンボジア駐在員でなく、東京事務所の責任者に任命された。

NPO法人JHP・学校をつくる会は、一九九三年にタイ国境からのカンボジア帰還難民支援ボランティア活動から生まれた。長い内戦で荒廃したカンボジアの自立のためにはまず教育だと考え、日本の篤志家から集めた資金で小学校校舎の建設を始めた。以来十九年間に建設した校舎の数は一六五棟（一棟平均五教室）に達している。

また、学生ボランティアを派遣し、寄贈する学校の校庭にブランコ等の遊具を建設している。この間に派遣したボランティアの数は八〇〇人をこえている。学校建設以外にも教育支援班を立ち上げ、音楽、美術、衛生教育の支援をしている。カンボジアには音楽や図工を教えられる教師が全くいなかったため、当初は日本から教師を派遣していたが、その後、小学校教師や師範学校生徒を対象にワークショップを開催して、音楽、美術の教師を育成している。また日本の子ども達に呼びかけ、鍵盤ハーモニカ、オルガン、クレパスなどを集めカンボジアへ運び込み、授業に活用している。こうして音楽や美術の授業が始まった学校の数はそれぞれ七十校をこえている。さらに多くの学校で授業が行われるよう、毎年音楽コンクールと巡回美術展を開催している。美術展には日本の子どもから集めた絵も展示しているが、美術展の来場者は毎年二万人を超えている。

JHPではこの他にも、授業で使う楽器を集めた際に集まった太鼓やトランペットを活用するためにマーチングバンドをつくり、毎年日本のマーチングバンド指導者協会から指導者を派遣していただき育成している。

またプノンペン市のごみ山でごみ拾いをして生活していた子ども達に初等教育を受ける機会を与えるため、CCH（Center for Children to Happiness）という児童養護施設を作り三十数名の子どもを施設から学校へ通わせている。

このような活動をしながら感じることは、日本には海外の恵まれない子どものために何かしてあげたいと考えている方が大勢おられることだ。

学校建設資金一棟五〇〇万円を出してくださる方、鍵盤ハーモニカを集めてくださる方。お金を出してくださる方も決してお金持ちの方とは限らない。むしろ海外の恵まれない子どものために自分に出来ることをしてやりたいという強い思い、人生でそのような決断をするためのドラマを抱えた方がほとんどだ。私達の役割は、カンボジアの子どものためになることをするだけでなく、日本のドナーの方々の強い思いを実現することにもあると考えている。

32LⅡ2B　三二年法学部卒

穏やかな日差しの中でゆったりと
くつろぐことのできる
フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場
駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に
注文なさったコーヒーは、支払いの際に会員
会友証を提示下さいますと無料となります。
営業時間　11：00～14：30、17：00～21：00
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902
駒場ファカルティハウス内

駒場友の会会報　第8号
2007年2月28日発行
駒場友の会
〒153-8902
目黒区駒場3-8-1
東京大学　駒場ファカルティハウス内
電　話　03-3467-3536
FAX　03-3465-3334
郵便振替口座
00170-3-481649
メールアドレス
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp
ホームページアドレス
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/ilovekomaba/